

一 懺悔の大道を辿りつゝ

明るいばかりが人生でない、暗いのも亦人生の動かすべからざる事實であります。「人生の明るい方面だけを見て、暗い點を見るな、而して快く笑へそこに生命が湧く」と教へる人もありますが、併しそれは、ほんの淺い見方である。危い藝當である。私共は電燈によつて、瓦斯によつて、終夜眞晝のやうに、眼を欺くことは出来ても、夜は矢張り夜である。人生の夜は如何しても拭ひ去られぬ。此の意味に於て、私共は正直に自然に有の儘に、この眞人生を見ねばならぬ。之を見ると、私共は痛切に自己の罪惡に戦く。罪惡に戦くものは救済を求め信仰に入つて、懺悔の心亦痛切である。懺悔の心痛切なるところ、感謝の情亦切實である。實に私共は、自分を省りみるとき、及ばぬ事のみにて、慚愧懺悔に堪へないが、またこれがために加へられたる御恩を思へば、感謝せずに居られませぬ。

懺悔と云ふことは、何れの宗教にも重んぜられてある。儒教といはず、神道といはず、基督教と云はず、回々教と云はず、佛教と云はず、凡そ古今の教と云はるゝ教に、之を大切にし之を重んぜぬものはありませぬ。我佛教に於ては、特に之が勧められてある。「若し懺悔せんと欲はゞ、端座して實相を念ぜよ。衆罪は草露の如く、慧日能く消除せん」とは、名高い『普賢觀經』の語である。此は理懺と申して、心に深く罪惡の本性を觀じ、眞理に合體する方法であります。相にかけての懺悔(事懺)には『心地觀經』や『法事讚』に三通りに示されてある。下品と云ふは、我身の罪惡を悔いて、一念惡かつたと思ふ思ひにかられ、全身に熱を催し、眼からは涙の溢るゝ程である。中品の懺悔といふは、全身に熱い汗を滴らし、眼からは血が流れる程である。上品の懺悔といふは、涙や汗位でない、全身の毛孔からも、眼からも鼻から

も、血汐ちしほが流れ出る程ほどであります。

然しかるに私共わたくしどもの所謂いはゆる懺悔ざんげとは、如何いかなるものでせう。高峰岳山かうぶがくせんも畜たくならぬ永劫えうごふの罪つみを抱いだいて居あながら、罪つみを懺悔ざんげすと云いひつゝも、血ちの一滴しずくも出でないばかりか、汗あせも出でねば涙なみだも出でぬ。自分じぶんの生活問題せいかつもんだいや、愛欲名利あいよくみやうりの爲ためには、血ちを吐はく思おもひで數日すうじつを苦くるしんでも、果はたして自己じこの罪惡ざいあくの爲ために、一夜やを泣なき明あかした事ことがあるか。阿闍世王あじやせわうは自分じぶんの罪咎つみとがに驚おどろいて悔熱くひねつし、苦悶くもんの餘あまり遍體からだぢうの熱ねつは嵩かうじて、臭瘡くさいかゆひが出來たと聞きいて、全くまったく嘘言うそのやうな氣きはせぬか。全身ぜんしんの毛孔けあなから血ちが出るなんて、思おもひもよらぬ事ことのやうに思おもはれはしませぬか。さて此これが如何どうでしやう。

蜀山人しよくざんじんと申まをして有名いうめいな狂歌師きやうかし、いつも貧乏びんぼうである。太田運平おほたうんべいといふ男をとこに、幾いくらかの金かねを借かりたが返かへすことが出來ぬ。逢あはねばよいがくと思おもつてゐる矢先やさき、ふと江戸えどの赤城阪あかぎさかで、ピツタリ出逢であつた。逃にげやうにも横道よこみちはなし、仕方しかたはないと腹はらをきめて、知らぬ顔かほの半平はんぺいで、通とほり過すぎやうとした。途端とたん、「ヤレ待まて！」ときた。振ふり向むかざるを得えぬ。その刹那せつな、やれ待まてと云いはれて顔かほが赤城阪あかぎさか、とんだ處ところで太田運平おほたうんべい

とやつてのけた。流石強欲さすががうよくの運平うんぺいも、これには叶かなはぬと逃にげ出したさうであります。

やれ待まてと云いはれた位くらゐで、面つらの皮かはが赤あかくなる程ほどに薄うすければ結構けつこうだが、打うたれて引ひつ搔かれても跡あとさへつかぬ千枚張まいばりでは困こまる。こんな人ひとに限かぎつて働はたらかないから、足あしの皮かはは吉野紙よしのがみよりも薄うすい。希ねがは足あしの皮かはは厚あつく面つらの皮かはは薄うすくありたいもの。私共わたくしどもも時ときとしては、本當ほんたうの罪惡ざいあくを幾分打明いくぶんうちあけることがある。けれども其時そのときは既すでに、片方かたほうに於おいて算盤玉そろばんだまをはぢいてゐる。これだけの懺悔ざんげをすれば、これだけの罪つみが消きえて、これだけの徳とくが得えられる。今少いますこし出ださうか、い

や少し引込めやうかと、飽算盤づくであつて、勘定高いこと夥しい。いつも釣錢をとる心で居る。この懺悔の傍に算盤を撥く心は、やがて自己の懺悔を評價して居るのではなからうか。この心は遂に懺悔利用の心に悪化し、懺悔を捨て、その所得の功德たる滅罪にのみ着目することゝなる。その様恰も矢場へ行つて空氣銃を打つ、甘く命中すれば時計の景物が出る。けれども景物欲しさに、的を狙はずして時計の景物を射て、ポカンと甘く命中した所で、景物は呉れぬばかりか怒られて了ふ。罪が赦して欲しさの懺悔、樂がしたさの信仰は、すべての的を忘れて、景物に狙をつけて居るのではなからうか。

私共の罪惡は決して、そんな生温いものではない、心の奥深く根ざしてをる。上調子な一片の懺悔や、不眞面目な半隻の詫ぐらゐで、消える筈のもでもなければ、濟む譯のものでもありません。何となれば、それは餘りに大きく、餘りに廣いからであります。秋の雨後、柿の木から滑り落ちて、右の足を打ち挫いた男があつた。人々は驚いて早速病院へ擔ぎ込んだ處が、この男未だかつて恁んな處に來たことのない、田舎育ちである。見る物聞く物悉くこの老人を驚かすばかりである。わけて自分の運び込まれた外科の治療室は、少からぬ恐怖と戰慄とを與へた。四邊を見れば、キラ／＼光る切開用の小刀や、圓い角い瓶に納めた藥や、いろ／＼外科用の道具が、備へ付けてある。マアあんなもので、恁んなに痛む足を切られて堪るものか。何とか免れる工夫はなからうかと、心配してゐる處へ、鬨を排して入り來つた御醫者が、亦髯武者である。愈困つたとハラ／＼してゐると「痛い所を出せ！」と命令的にきた。スワ大變。痛い右の足を出さうかと思つたが、又ツと左の足を出した。お醫者は屈げたり伸ばしたり、一二ヶ處押へて「痛いか」と云

へば「痛くない」といふ。「如何したものか」と聞けば「如何もせぬ」と云ふ。「左様か、そんなら高い處から落ちて、吃驚して腰を抜かしたのだらう、歸れ」。「有難うございます」。何が有難いか、一つも有難い事はない。歸つてから苦しみくぬいて、お蔭で一生生れもつかぬ不具になつたとか云ふ。

私共の日常生活は、常に恁んな藝當をやつて居る。腹の底には云ふに云はれぬ苦悶を宿して居ながら、而も痛い右の足を隠して、痛くない左の足を出し、平氣を装うて居る。其爲痛みは愈増すばかり、遣瀨なさはこみ上げる一方である。そしてとんでもない結果を招いた揚句、「こんな筈ではなかつた」と悔しがる。とてもものに煮ても焼いても食へぬ奴ではなからうか。かくて私共は何處までも、罪惡の塊であり業報の結晶であります。千萬遍の懺悔も、百千度のお詫も、決して之を拭ふことは出来ぬ。さらば懺悔をせぬでもよいかと云ふに、それは憍慢邪見の骨張である。それとも、押へ切れない衷心の痛みから、包むに餘る内心の悔しみから、「これは悪かつた」と、苟くも一念懺悔の思が起つたならば、その起り來つた本源を尋ねゝばならぬ。「懺悔せよ罪が消える」といふのは、佛の御語である親の聲である。凡夫の言ふべきものでなく、子の語るべきものではありません。總じて親としては何かの口實を求めて、その罪を赦してやりたいが腹一杯である。無理な願望も叶へてやりたいが、胸一杯である。そのため「お詫せよ堪へてやる」と云ふ。それに何ぞや「お詫したから堪へて呉れ」とは、何たる横着な言分であらうぞ。「許して呉れ未だ呉れぬか」ときては、全く問題外である。沙汰の限りではありません。

不眞面目な放蕩息子の詫が、淺墓な凡夫の懺悔が、道理の上から云つて何の役に立たう。何にもなりはせぬ。而も之を事々しく取上げて、過分の價値

をつけて褒めて、濟みもせぬものを濟まして下さるのは、特別な親の慈悲であり、如來の恩寵であります。元々なかつた私共の心に、この念の發つたのは、起さして下さる親の念力がある、佛の御方便である。如來様は濫太い私の心を促して、衷心の痛み内心の罪惡に氣付かせ、覺束ない私のこの懺悔によつて、私に大悲の遺瀨なさを知らせて下さる。一度この大悲の親様に氣付いてみれば、身の罪惡を懺悔せずに居られぬ。懺悔すればする程、斯る者をと一層親心の切なさに咽ばずに居られぬ。眞實親の心が解つてみれば、叱られて喜び褒められて耻かしく思ふ。眞實に叱つて下さるのは親ばかりと感じ、褒められるれば褒められるほどの價値のない者をと、いよく頭が下つて来る。茲に親子心が一致して、永く融け合ふのであります。「念々に稱名して常に懺悔す」。唯々如來の御慈悲より外はありません。